

日本大学工学部

校友会報

第 48 号 昭和61年9月1日

目 次

ごあいさつ	2
昭和61年度第29回通常総会報告	3～4
科学技術行政の一端に触れて	5～7
同窓会・OB会だより	8
校友短信	9
ロンシャン教会を訪ねて	10
キャンパスミニメモ	11
昭和62年度入学試験案内など	12



工学部管理棟前の中庭

北心寮跡の碑、古田重二良先生の銅像、そして
万朶(ばんだ)の桜の向うに体育館を眺める



ごあいさつ

日本大学工学部長
本郷 忠敬

校友の皆様には、全国各地で目覚ましい活躍をなされておられ、心からお慶び申し上げます。また日頃母校工学部に対して暖かいご協力とご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

昭和61年度の入学試験では、日本大学は昨年度に続いて志願者が激増し、全国のトップの座をまもり続けました。とりわけ工学部は2年連続で志願者が飛躍的に増大しました。これも校友の皆様方の社会におけるすばらしい活躍によるものであり、また工学部の日頃の教育・研究の研鑽の成果が社会から高く評価されたためと思います。

工学部は現在優秀な教授陣をそろえ、教育・研究設備の充実をはかり、ますます学部の発展に意欲を燃やしています。また学生数の適正化をはかり、学生の質の向上と教育効果の向上に努めています。去る5月には文部省視学官による定例の工学部視察が行なわれ、教育・研究その他全般にわたってお褒めの言葉をいただいています。

校友の方々には、後輩の就職について、日頃多大のご指導・ご協力を賜わり、お蔭様で毎年多数の学生が優良企業に就職し、ほぼ満足する結果を得ています。しかし本年は大幅なしかも急速な円高のため、輸出不振に陥り、特に中小企業は致命的な打撃を受けるなど、国内における経済活動の沈滞を招いています。この影響で求人関係も業種によっては低迷すると予想され、格段のご配慮をお願いいたします。

いつか所用などで東北新幹線に乗り郡山を通過する機会がありましたならば、是非安積永盛当りで車窓越しに母校をご覧になって下さい。大講堂の壁面にひとときわインカラーの「日本大学」の校名文字板が目をはきまします。時計塔を中心になつかしい工学部の雄大なキャンパスが広がっています。特に夜間は一文字ずつライトで照らされて、より鮮明に浮かび上がって見えます。母校のキャンパスを眺め、改ためて4年間を過ぎた青春を思い出され、感慨無量なものがあることと思います。

また本年は事務局長の更迭という人事異動がありました。石田昭二事務局長は4月23日付をもって本部人事部長に栄転され、後任として経済学部の佐藤光二経理長が7月1日付で工学部事務局長に任命されました。佐藤新事務局長の今後のご活躍を期待いたします。また石田前事務局長には長い間ご苦勞様でした。紙面を借りてご報告させていただきます。

終わりに校友各位の益々のご健勝とご活躍を祈念いたします。(日本大学教授・工博・工学部校友会顧問)



ごあいさつ

日本大学工学部校友会会長
武田 仁幸

会員諸兄にはお褒りなく御健勝のこととお喜び申し上げます。今年度も各地の工学部校友会の支部総会に出席いたしまして感じましたことは各地域においての校友諸兄の活躍は実にすばらしいの一言に尽きます。

これも来年、工学部が郡山に開設されて40周年を迎え、2万6千余名の校友を社会におくり、日本大学建学の精神を旗印に輝かしい伝統と大魂を造り育てていただきました先輩校友諸兄に心から感謝申し上げ、今後益々の御活躍をお祈りいたします。

我々日本人には各種の会合を持ちますと懇親会の酒席があり、これも楽しみの一つです。諸兄も今が働きざかりでお付き合いの酒席も多い事と存じます。小生ただいま郡山西ロータリークラブのプログラム委員長を務めております関係上、例会にゲスト卓話の諸先生達をお願いしておりますが安藤貞重氏の卓話の一部を紹介いたします。

世の中に酒と女はかたきなり
どうぞかたきにめぐりあいたし

日本酒道会酒道五則

- 一、酒は楽しく飲むべきなり、「ほろ酔」をもって最上となす、酒は酒量にあらず、酒品なり。
- 二、酒に飲まるるなかれ、酒席にてまわりの人を不快にするは、下道なり、ユーモアを肴と心得よ。
- 三、ただ酒は遠慮すべし、自分の酒代は自分で支拂う気概持つべし、ただ酒は汚職取賄の温床なり。
- 四、酒を飲む時は大いに食すべし、食せずして酒を飲む事を誇るは決して健康な酒飲みとはいえず。
- 五、適度な酒は百薬の長のみか家庭円満、事業繁栄、長寿至福に通ず、自信を持って酒道に精励せよ。

昭和23年酒友3人で発足し現在会員は、郡山在住者で100名弱で段位があり、安藤会長は名誉九段、「酔ってくだんの如し」とは安藤会長の弁、

百薬の長と飲めかしうまざけ
かみのめぐみのこのうましざけ

いくら若さを誇り頑健でも一寸先は闇ということも考え、ご健勝あらんことを祈る。私も酒道会会員で2段であるが五則を思い出しながらの酒品である。蛇足ながらゴルフのハンデは12。健康に注意しながらのご挨拶といたします。

(土木工学科3回卒、東和工業㈱)

昭和61年度第29回通常総会報告

昭和61年度の入学式が行われたのは4月7日で、新たに“桜門”をくぐる1,140余名の若人の前途を祝う正門の桜並木は例年になく、つぼみが硬くさびしく、明るさがなく、むしろ現代の世相を表現しているかの様であった。昨年秋よりの円高で更に不景気が加速されつつあり、企業は一層の工夫と努力が要求される時期に、昭和61年度第29回通常総会が、4月19日(土)午後2時より、日本大学郡山研修会館において、会員多数出席のもとに開催された。



総会は半沢副会長の開会の辞により始まり、引続き武田会長より、本会も再来年は30周年になり母校は学部開設40周年を迎え、又64年には日大100周年、校友は60万余を数え、この間建学の精神を諸先輩が継承し、明治、大正、昭和の風雪に耐えて到達した、私学の雄を想うとき、責任の重大さを痛感する。円高不況にあえぐ中で、一段と工夫と努力で、乗りきっていただきたい。と挨拶があった。引続き加藤理工学部校友会会長から会の状況等について報告説明があり協力方の要請があった。

次いで議長に秦 裕(土6回)、書記に曾部忠義(電20回)、寺山喜信(土23回)、議事録署名人に落合正喜(土10回)、三浦昌雄(土14回)の各氏がそれぞれ選出され、議長挨拶の後、議事に入った。

議事の進行と結果は次のとおりです。

- 報告第1号 昭和60年度会務報告について
- 承認第1号 昭和60年度一般会計収支決算について
- 承認第2号 昭和60年度特別会計収支決算について
- 議案第1号 校友会会則の一部改正について
- 議案第2号 昭和61年度事業計画について
- 議案第3号 昭和61年度一般会計収支予算について
- 議案第4号 昭和61年度特別会計収支予算について
- 議案第5号 役員欠員補充について

報告第1号：佐藤事務局長より、会員、会務、財産の状況について説明報告、特に異議なく承認された。

承認第1、2号：小川経理部長一括提案説明し、次いで、会計監査を代表し、小栗治男氏より監査の結果、適正と認められる旨報告があり、審議の結果、特に質疑なく異議なく承認された。議案第1号：武田会長より、終身会費の現在5,000円を本年度卒業生(62年3月卒業生)より10,000円に値上げしたい旨提案説明あり審議の結果、特に異議がなく提案どおり承認された。議案第2号：村田事業部長より事業計画についての提案説明がある。これに対し、矢俣敏之氏(建8)より支部、支会組織の強化について具体的にどのような形で行うのが、また学生に対しては、谷久嘉典氏(土8)より、在校生の県人会等の活動についての援助はどうか等質問があり、武田会長よりできるだけ考慮したいと答弁し、了解され提案どおり承認された。議案第3号、4号：小川経理部長より一括提案説明あり、審議の結果、特に異議なく議案どおり承認された。議案第5号：武田会長より、事務局長及び理事1名の任期中辞任にともなう欠員の補充について、現在のメンバーにて、残任期間1年を執行してゆきたいと提案、審議の結果、異議なく提案どおり承認された。

以上で、全議事、議案が議決承認されました。

その他、各支部の近況について支部長より報告があり、北は北海道、南は九州、四国に於ける活動状況を知ることができた。最後に武藤副会長の閉会の辞で総会を終了した。



引続き懇親会に移り、来賓の方々、本郷忠敬工学部長、高橋堯県支部長、三好康夫生産工学部校友会会長、鈴木洋父兄会会長より御祝辞を戴き、石田昭二工学部事務局長の音頭で乾杯し、祝宴に入った。今年は例年になく桜の花の開花が遅く、宇都宮地方が満開とのこと、忙しいところを新幹線でかけつけてくれた、本郷工学部長の談、母校工学部40周年の事業計画の夢をみながら、出席された先生を囲んで、定刻までなごや



かに思い出話を交え歓談が続けられた。最後に校歌を斉唱し、万歳三唱して散会した。



支部等の総会

○北海道支部総会 (第13回)

61年7月16日(水)
札幌市 ホテルノースシティ
参加会員 50名
本部から 武田仁幸会長
来賓 後藤 尚教授ら7名

○九州支部総会 (第7回)

61年7月18日(金)
福岡市 城山ホテル
参加会員 70名
本部から 武田仁幸会長、小川敏彦経理部長
来賓 福地利夫教授ら8名

○東海支部総会 (第16回)

61年7月26日(土)
名古屋市 ホテルキャッスルプラザ
参加会員 20名
本部から 武藤貞泰副会長

○四国支部総会 (第2回)

61年8月2日(土)
高松市 きぬき荘
参加会員 40名
本部から 半沢 忠副会長

昭和60年度一般会計収支決算書

歳入

単位：円 △…減

款項	種	目	予算額	決算額	比較増減	附記
会費	1	終身会費	5,000	5,430,000	5,425,000	
	2	人会金	10,000	11,550,000	11,550,000	
		計	15,000	16,980,000	16,975,000	
繰越金	3	前年度繰越金	19,071,105	19,071,106	0	
		計	19,071,105	19,071,106	0	
繰入金	4	期前財産より繰入金	3,980,000	3,980,000	0	
		計	3,980,000	3,980,000	0	
雑入	5	預金利息	500,000	737,619	237,619	
	6	職員負担金	350,000	367,963	17,963	
	7	名簿代金	30,000	99,800	69,800	
	8	雑収入	3,894	11,400	7,506	
		計	883,894	1,216,782	332,888	
合	計		23,950,000	41,257,888	17,307,888	予算対決率比 172.2%

歳出

款項	種	目	予算額	繰上増減額	予算見直し額	決算額	比較増減	附記
事務費	1	給料手当	3,920,000	0	3,920,000	3,909,796	△ 10,204	
	2	保険料	560,000	39,816	599,816	599,816	0	交通費より
	3	文通費	520,000	△ 39,816	480,184	468,090	△ 12,184	保険料へ
	4	旅費	60,000	0	60,000	46,170	△ 13,830	
	5	交際費	400,000	0	400,000	392,610	△ 7,390	
	6	消耗品費	110,000	0	110,000	103,796	△ 6,204	
	7	備品費	130,000	0	130,000	130,000	0	
	8	印刷製本費	120,000	6,550	126,550	125,550	0	雑費より
	9	通信運搬費	300,000	0	300,000	298,920	△ 1,080	
	10	修繕維持費	10,000	0	10,000	6,000	△ 4,000	
	11	光熱水費	40,000	0	40,000	30,000	△ 10,000	
	12	雑費	150,000	△ 6,550	143,450	130,485	△ 12,965	印刷製本費へ (予算対決率比) 98.8%
	計	6,320,000	0	6,320,000	6,242,143	△ 77,857		
事業費	13	組織対策費	700,000	0	700,000	600,000	△ 100,000	
	14	会費発行費	5,470,000	0	5,470,000	5,462,500	△ 7,500	
	15	会員管理費	1,900,000	0	1,900,000	1,899,770	△ 230	
	16	名簿作成費	430,000	0	430,000	421,722	△ 8,278	
	17	下宿対策費	10,000	0	10,000	7,450	△ 2,550	
	18	図書供与費	500,000	0	500,000	500,000	0	
	19	式典費	2,120,000	0	2,120,000	2,081,450	△ 38,550	
雑費	20	母校訪問費	180,000	0	180,000	169,600	△ 10,400	
	21	負担補助援助費	850,000	0	850,000	850,000	0	
	22	旅費	470,000	0	470,000	451,590	△ 18,410	
	計	12,630,000	0	12,630,000	12,446,272	△ 183,728	(予算対決率比) 98.5%	
会議費	23	総会費	700,000	0	700,000	699,650	△ 350	
	24	行員会費	420,000	0	420,000	299,500	△ 120,500	
	25	連絡協議会費	500,000	0	500,000	347,740	△ 152,260	
	26	旅費	630,000	0	630,000	583,340	△ 46,660	
	計	2,250,000	0	2,250,000	1,930,230	△ 319,770	(予算対決率比) 85.8%	
繰出金	27	職員退職給付積立金特別会計繰出金	250,000	0	250,000	240,000	△ 10,000	
		計	250,000	0	250,000	240,000	△ 10,000	(予算対決率比) 96.0%
積立金	28	積立金	2,000,000	0	2,000,000	2,000,000	0	
		計	2,000,000	0	2,000,000	2,000,000	0	(予算対決率比) 100%
予備費	29	予備費	500,000	0	500,000	0	△ 500,000	
		計	500,000	0	500,000	0	△ 500,000	(予算対決率比) 0%
合	計		0	23,950,000	22,858,645	△ 1,091,355	(予算対決率比) 95.4%	

歳入額 41,257,888円

歳出額 22,858,645円

差引残額 18,399,243円を翌年度へ繰越するものとする。

財産の状況 (昭和61年度3月31日)

基本財産	引当財産	運用財産	合計
10,421,668円	2,300,089円	18,399,243円	31,121,000円



科学技術行政の一端に触れて

科学技術庁無機材質研究所

和田 健二

1. はじめに

卒業して早や20年が経過し、現在は筑波の研究学園都市に住み研究に没頭しております。私が入所した昭和50年頃の研究学園都市は、まだ陸の孤島という言葉通りの環境で、道なき道のやせた松林の中にぽつんと研究所が立っていました。それが今では筑波大学、図書館情報大学をはじめ、各省庁の43の国立研究機関が勢揃いし、周囲には沢山の民間企業が誘致されて、一見外国を思わせる環境が整いました。（図1参照）



図1 無機材質研究所

昨年は科学万博が開催され、これによって筑波研究学園都市は一応の完成を見るに至りました。この間人口は約4万となり、日本一の村を形成するまでになりました。

ところで私は、昨年の4月から1年間霞が関の本庁（研究調整局総合研究課：今年の7月機構改革により研究開発局と改称）へ併任となり、我が国の科学技術行政の一端に触れる機会を得ました。併任を決断するについては、研究者として失うものが大きいため初めはためらいがありました。しかし最後はたった一度の人生を思う気持と、心身共に一つの転機にあるとの判断が優先しました。実はこの体験を私だけの胸に留めておく積りでしたが、恩師の進めを熟慮しそのことの非を悟り、筆を取ることに致しました。ですからここでは個人的な話を避け、できるだけ多くの方々に共通した内容をと考えました。つまり標題にもあります様に、かい間見た本庁業務の一端について述べてみたいと思います。

2. 技術から科学へ

ご承知のように日本は科学技術立国を目指して、「追い付き型」から「創造型」へと転換が迫られています。特に国立研究機関では、リスクの大きい基礎研究（科学）を行う必要に迫られてきました。これまで基礎研究といたすと国立研究機関の専売特許でありましたが、先端技術の開発競争がここまで激しくなりますと、民間企業でも否応なしに基礎研究を手掛けねばならないところまで来てしまいました。国立研究所はその存立の基盤さえ危うくなってきた訳です。国立研究所でも、科技厅と通産省の国研とではどこがどう違うのかといった質問を良く耳にします。最近では科技厅は「種子から双葉まで」、通産省は「双葉から苗木まで」のところをやるということで、一応の交通整理はできています。しかし更に文部省との関係もあるわけですから、実際はもっと複雑になります。

いずれに致しましても研究開発競争の激化によって、基礎研究に対する理解が高まりつつあることは大変好ましい傾向だと思います。しかしまだ欧米の先進国に比べますと足が地に着いておりません。我が国における科学技術は、応用研究（技術）が優先してきました。そして技術の行き詰まりによって新たに科学の重要性を認識するようになりました。これに対して欧米の先進諸国は、科学を重視するあまり技術の重要性を軽視しました。どちらが正しいかは、今日の日本の繁栄を見れば一概に決められません。ですから日本が欧米の物真似だけで発展してきたという非難は、余り当たっていると思われません。お互に相手の長所と短所に気付いた訳ですから、いつまでも非難し合っても問題は解決しません。大事なことは、これから本当の競争が始まるということです。つまり自分がないものを相手から学び、相互に啓発されて一段高い次元の新しい分野が展開され、技術革新がもたらされることになります。

3. 科学技術行政について

我が国の科学技術政策は、最高審議機関である科学技術会議（首相の諮問機関）で決まります。このためのお膳立ては科技厅が行いますが、ここでは産業界の要望や国及び大学の研究開発の現状をよく把握した上で、「答申」という形で取りまとめられます。答申とは

諮問に対して意見を申し述べることでありますが、平たく言いますと行政官の判断基準を示すものです。ですからどんなに素晴らしい研究でも、この答申に沿った研究でなければ研究費はなかなか付きません。しかし換言すれば答申に沿った研究内容にしさえすればよいのですから、こうした問題に対処する場合には厳密に考え過ぎないほうがよいでしょう。

科学技術会議への最近の答申は、一昨年に11号答申としてまとめられました。また科学技術庁長官の諮問機関である航空・電子等技術審議会では、今年3月に9号答申をまとめました。これらの答申では特に基礎研究の重要性が謳われ、先導的科学技术としての物質の新現象の探索と解明、新物質・材料の探索と創出などのいわゆる材料分野へ国が本腰を入れ始めたことが判ります。答申作成にあたっては、一応の目安として10年位先の事まで考えてやっていますが、世の中が忙しくなりますと答申のご利やぐもそれだけ短くなる傾向にあります。

4. プロジェクト研究の推進

科技庁では昭和56年度から先端的な科学技术の中で特に重要と認められる研究に対して、科学技術振興調整費（昭和60年度71億円）を計上し総合的研究開発プロジェクトを推進しています。現在推進中のプロジェクトは約30で、図2に示したような分野とシステムによって実施されています。

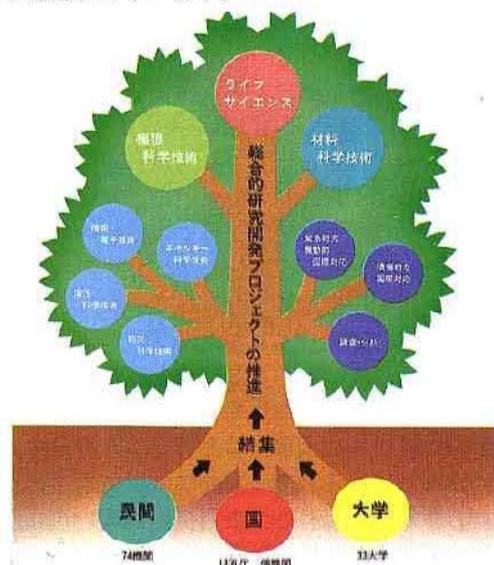


図2 科学技術振興調整費によるプロジェクトの推進

この他にも昭和56年度から創造科学技術推進制度という流動研究システムをスタートさせ、すでに次の4つの材料プロジェクトにおいて多くの成果を得ております。

- (1) 超微粒子
- (2) 特殊構造物質
- (3) ファインポリマー
- (4) 完全結晶

私は本庁で、主として振興調整費によるプロジェクトの推進に携わりました。担当したプロジェクトは、①高性能材料開発のための表面・界面の制御技術に関する研究、②半導体の格子欠陥を利用した材料機能の制御に関する研究、及び③大型超高压力発生システムに関する研究の3テーマでした。特に①の研究は私自身の研究と多少係わりがあるため大変勉強になりました。研究所にもどって冷静に考えてみますと、先端科学技術の概要がおぼろげに把握できた喜びとは逆に、その中に占める己の研究を思うと複雑な気持ちになります。しかし研究者としての道を選んだ以上、限りなく真理を追求しなくてはなりません。

5. 官僚組織について

官僚組織と言いましても、研究所では事務官の一部の人だけがこうした組織に組み込まれていて、本庁との人事交流があります。しかし研究者には本庁との人事交流はもとより、研究所間、省庁間の人事交流すらありません。従いまして研究費をあまり必要としない研究者は、必然的に行政とは無縁になります。ところが本庁における官僚組織は全てが直接行政に係わるわけですから、研究者側から見ますとまさに異様な感じがします。つまり、研究が比較的自由な雰囲気の中で時間に縛られることなく進められるのに対し、行政官の仕事は反対に徹底した上下関係の中で、絶えず時間の制約を受けながら行われます。本庁ではこのことを“やっつけ仕事”と呼んでいます。やっつけ仕事は注意しませんとその場しのぎの仕事となり、長期展望を欠きがちです。そして最も恐ろしいことは、たった1枚の紙切れが一人歩きして表面的なことにまで威力を発揮することです。

ところで最近の先端科学技術は、本庁の行政官では制度上どうしてもカバーしきれないところまでできています。従って各省庁の国研の研究者が応援に出るわけですが、こうした処置はいつまでも許されるべきではありません。何故かと申しますと先端の科学技術に対応できる専門官を置けば解決することで、むしろこれが本来の姿だと思います。こうすることによって長期展望を科学技術行政に反映させることが可能となります。現状は公務員の人員削減などを理由に実現しそうにありません。いま一つの原因は、現行制度では一つのポストに留まる期間が数ヶ月から長く2年程度であるため、必然的に腰を据えた仕事ができない環境に出来上っています。ですからこのままでは、科学技術立国を自負する我が国の最先端部門としての将来性が危ぶまれます。行政官はもちろんこうした点に配慮して、できる限りの改善策はこうじています。例えばこの7月に行われた科技庁の機構改革は、そうした危惧の現われと見ることもできます。しかし真の解決までには、まだまだ時間がかかりそうです。

6. 本庁での仕事を振り返って

本庁での仕事の内容は民間企業、国研及び大学の研究者の代弁者として大蔵折衝に始まり、プロジェクト研究の推進、取りまとめ、成果報告書の作成、終了研究の評価、特許、会計検査そして次年度にスタートさせる新規課題の検討作業など実に日まぐるしい1年でした。総合研究課は10名のプロパーと8名の応援部隊とからなり、プロパーは総括の仕事が主体で、我々8名は振興調整費関係と答申の仕事が中心でした。朝は時差出勤のため、仕事は9時半頃から始めますが、昼間は電話や雑用に追われて落ち着いた仕事はできません。ですから机に向かって書類を書き始めるのは、どうしても夕食後ということになります。従って帰宅は通常夜の11時前後となり、予算時期には当然午前様に相成る訳です。異状社会に気付いた時は後の祭りで、また過去に健康を害した人の話が耳に入るものですから、なによりもまず身体に注意しました。ですから毎日筑波から通う訳にもいかず、単身赴任し東京の実家から通勤しました。

今思いますと無事仕事を成し遂げられた幸運と、誰もが経験できぬ仕事を体験できたことを感謝せずにはおれません。そして本庁の多くの人達を知り、また民間、大学及び国研の第一線の研究者とも知り合えたことは何よりの財産だと思っています。こうした経験が自分のこれからの研究に役立つかどうかは別として、少なくとも充実した1年だったと思います。研究所では本庁併任を無事果しますと“務所帰り”と称して一人前に評価してくれますが、研究者としてはむしろこれから勝負どころです。

7. 今後の研究の在り方

国が先導して行うプロジェクト研究に対する考え方は、各省庁によって異なりますが、同じ付置研究所においてさえ相異があります。科技庁を例にとりますと、金属材料技術研究所では一般の会社などと同じように組織が縦割りになっているため、上司の考え方が比較的組織に反映されるようになっていきます。つまりどちらかと言えば応用研究指向です。ところが私のいる研究所はグループ制と称して特殊なプロジェクトが組まれる横割り組織です。それ故、通常研究以外のプロジェクト研究(例えば振興調整費による研究や特別研究)への参加は研究者の意志にまかされるところがあります。つまり基礎研究指向です。ですからこれからの研究は、プロジェクト研究と研究者の自由意志を尊重した通常研究との程よいバランスが必要で、創造型の研究にはむしろ後者に力が注がれるべきです。

これまで基礎研究の重要性が叫ばれながら、科学技術行政に具体的に反映されておりましたが、11号答申に謳われたことは正に画期的なものと認識しております。今後日本で基礎研究が根を降ろすためには、

目先の成果にとらわれることなく、長期的な視野のもとに研究者の地道な努力に任されるべきです。そのためには行政官は研究者の声に素直に耳を傾け、一方研究者は官僚組織の欠点を知ってこれを補ってやるだけの度量が必要です。

欧米の先進諸国はすでに応用研究の重要性を認めず々と手を打ち始めています。また基礎研究の重要性を再認識して、今まで公表していた情報を徐々に提供しない方向に向っています。データが欲しければ潔くお金を払って買いなさいという時代が到来しています。今後国際化がますます進む中で、礼儀と競争とをきちんとわきまえることが肝要です。

これまで人類の歴史は自然との戦いであって、取り分け科学技術は人類のあくなき冒険心と知識欲とによって駆り立てられ、今日の繁栄をもたらしました。最近では科学技術一辺倒の時代から、精神文化(人間性、精神性、文化性)を包み込んだ科学技術へと移りつつあります。つまり異分野との融合が要求されるようになってきました。こうした傾向はなにも先端科学技術に限らず、様々な分野へと広がりはじめています。例えば古代史を科学的に調べようとする風潮です。古代史の謎に科学的なメスを入れることによって、古代史は塗り換えられるかも知れません。また水中考古学に関しても、科学技術の裏付けによって発展させようとする気運が高まっています。科学技術もこうした目で見つめていますと、我々に夢を与えてくれます。

8. あとがき

近頃よく心の寄り所であった「科学技術の神話」がぐらつき始めたという声をよく耳にします。しかし果たして本当なのでしょうか? 地球規模で社会がアモルフラス化してきたからといって、直ちに科学技術が揺らぎ始めたと考えることは早計です。何故なら自然の節目はまだまだ解明されていません。また今後の科学技術が人間社会との調和ある発展を目指したテクノロジー・アセスメントにあることははっきりしています。

歴史的に見た科学技術の発展は、「分離型」に始まり、次いで「複合型：ハイブリッド」になり、最後に「融合型」になると言われています。今日の混沌とした社会情勢は、複合型から融合型へと移行する過渡期にあります。ただ単に先がまだよく見えないというだけのことです。もしこのことに問題があるとすれば、人間が時々に応じて科学技術を勝手に解釈してきたことです。つまり科学技術の神話は不変で、夢を与えてくれるものなのです。

(工業化学科第13回卒)

同窓会・OB会だより

管弦楽部、関東地区OB会

加藤 敏

OB会を開こうという声が在学中からありましたがとりあえず、関東地区だけで開催しようと、先輩達と話がまとまり、きつそく校友会に連絡をとり、部員名簿を送ってもらったところ、OB119名中54名が関東近県ということがわかりました。昭和60年12月7日に銀座でOB会を開催しましたら、18名の参加がありました。

卒業以来、初めて逢う人がほとんどでした。ひとりひとり自己紹介を行ない、オーケストラの歴史や学生当時の話を語り合い、ひとときを楽しく過しました。

校友会からいただいた名簿には、記載されていない人もおりますので、名簿をさらに充実して、実社会の中で縦横のつながりを持ち、日常の中でもお付き合いの輪を広げてゆけたらと思います。

今度は東磐梯寮で合宿をしようという声も出て、楽しい気分にはたり、夏にまたやろうと再会を約して散会しました。(機械工学科第22回卒、東海電気工事株東京支社)



郡山北工高桜門会歓送迎会

松永 督

郡山北工高日大桜門会は発足以来、10余年を数えました。今年も5月31日、郡山市内において、武田仁幸工学部校友会長の参加のもと、会員約30人の先生の出席を得て、総会、懇親会を開きました。

武田会長からは、北工桜門会の意義と重要性、校友会活動への一層の協力と組織拡充の要請、連携を強調され、会員一同それらの趣旨に賛意を表しました。

このように北工桜門会は、一致団結して和やかに推進がはかられており、更には日大校友会の益々の発展にも一層の力添えを深めていくことを約して、散会しました。(工業化学科第2回卒)

土木39年度入学「桜三九会」

北村 和

本会の名称は工学部の桜並木と入学年度(土木39年度)に因んで名付け、3年毎に同級会を開いています。第5回「桜三九会」を61年5月31日に東京の新高輪プリンスホテルで、木村喜代治先生・杉内祥泰先生・村田吉晴先生の各恩師をお招きし、遠く北海道等から多数の初参加者を得て39名が集い盛大に開催しました。

卒業から18年がたち、久しぶりに会う顔に学生時代を懐かしむなか、木村先生より現在の学生気質・母校の発展ぶり等のお話を受けた後、各諸氏の近況報告や思い出話にと予定時間をこえて歓談しました。

最後に全員で校歌を力強く合唱、次回は63年10月予定の「母校を訪ねる会」に合わせて郡山で開催することを約して散会しました。(東京都下水道局)



山口アカシヤ会

山田 啓介

山口アカシヤ会は会則を決めて8年が過ぎました。今年から1年おきに地方に会場を移し、今回は下関で開きました。下関のネオン街にもこの日は日大校歌が流れました。会員の中には郡山の女性と結婚をした人が4人もおり、我々と郡山の縁は切れそうにありません。いつまでもこの会が続くよう約束し合っています。(建築6回卒、権建築設計事務所、下関市大和町)



校 友 短 信

土木工学科

◆北御門義廣 (10回卒、久留米市役所)

61年2月16日付で、建設省より久留米市へ出向し、久留米市建設部長を拝命いたしました。九州支部の諸兄のご指導をお願いします。

(61. 3. 17受)

◆小坂孝雄 (19回卒、総合開発工業㈱秋田支店土木部 土木課長)

東鉄工業仙台支店の鈴木晃君 (18回卒) と、偶然にも、本年1月から秋田市の現場で一緒にやっています。16年ぶりの再会です。

(61. 2. 22受)

建築学科

◆高橋三郎 (専1回、学部3回卒)

山形工業高校にだけ33年3カ月勤めて、この春退職いたしました。これからは、今までの歩みを大切にしてい、それぞれの思い出を胸に温め、趣味を生かし、充実した生活を送りたいと思っています。

(61. 4. 26受)

◆岸本慶範 (8回卒、島根医科大学)

61年2月16日付で、九州大学から島根医科大学に転勤になり、慣れない現場で右往左往しております。雪景色を久しぶりに見ることができ、郡山を懐しく思い出しています。

(61. 3. 24受)

機械工学科

◆江指皓司 (12回卒、北海道小松販売㈱)

22年間にわたり、小松本社、特機、業務課等に勤務し、このたび、北海道小松販売の札幌支店札幌北営業所に着任致しました。北海道の校友の皆さんのご支援をお願いします。

(61. 6. 10受)

◆密田浩太郎 (29回卒)

小松フォークリフト㈱サービス部から、小松アルジェ事務所勤務を命ぜられ、このたび着任いたしました。地中海に面したアフリカ北部の町です。

(61. 4. 4受)

電気工学科

◆齊藤錠二郎 (8回卒、大日設備㈱代表取締役)

卒業以来、母校を訪ねる機会もなく、年に2回の会報で、立派に近代化されたキャンパスの様子など、すばらしくなつかしく拝読しております。

(校友会の事務局へのお便りや、連絡などから) 無断で掲載いたしました。ご了承下さい。

(61. 1. 8受)

◆藤森文男 (27回卒、㈱日本マイクロリンク取締役副社長)

マイコン・ソフトの開発を目指して、日本マイクロリンクを に設立しました。

(61. 4. 19受)

◆林 良二 (31回卒、フォスター電機㈱)

フォスター電機は昭和24年に創業した音響製品メーカーで、フォスターグループの生産するスピーカーは世界の需要の20%以上です。フォスター内の私の周辺には工学部卒の人はおりません。優秀な後輩が入社されることを期待しています。

(61. 3. 18受)

工業化学科

◆熊谷好人 (24回卒、日管興業㈱)

59年12月より故郷に帰り、日管興業に勤務しています。建設業関係を中心とした会社ですが、おかげで多忙を極めております。在学中、空手道で、「頭脳と心身の鍛練」をしておいてよかったとしみじみ感じております。

(61. 3. 8受)

噂のページ

◆渡辺幸夫君(土木1回卒) 渡部 修君(土木2回卒)

福島県庁に永年勤務されている両君は、61年5月16日付で

渡辺幸夫 福島県土木部次長(業務:都市担当)

渡部 修 福島県土木部次長(業務:土木担当)

に栄転されました。2人揃って同窓生が就任されるのは珍しいことだそうです。渡辺幸夫君は工学部校友会の初代会長で現在は参事として本会の発展に尽力されています。(事務局)

◆久野 清君 (建築24回卒、郡山市議会議員)

昭和60年の10月14日から11月2日まで、国際青年年記念事業の「85福島県若人の翼」に参加されブラジル・バナグアイ・アルゼンチン・アメリカ合衆国を訪問してきました。目的は、南米における日系人の位置づけを探りながら、世界の中での日本の位置づけを把握することにより、真の平和への道を模索しようとするものです。日本人移住者が勤勉で研究熱心であること、南米における日系人の位置づけは、確固たるものであること、など、日本民族の優秀さと日本の良さを再発見されて帰国されました。これらの体験を、今後の活動に活かされるものと期待されます。(事務局)

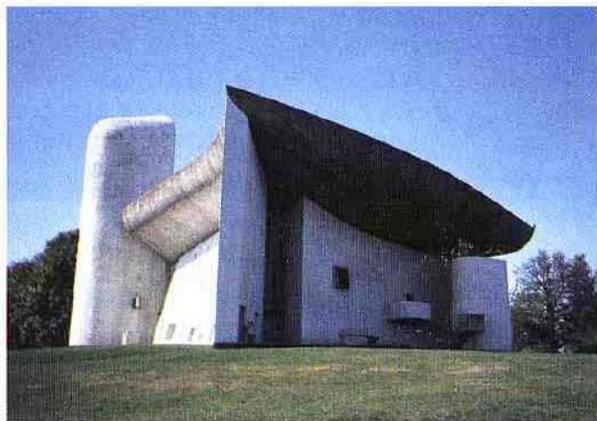
ロンシャン教会を訪ねて — 旅の思い出 —

島田建築事務所 建築家 島田喜男

スイス国境に近いベルフォールというフランスの田舎町に列車で到着したのは、午前11時頃であった。ロンシャンという村を通るバスを探すため、人通りの少ない駅前に立って辺りをながめた。

車やバスが駐車している広場の向こう側に道路があり、道路に沿って組積造の古い町並みが続いている。

それにしても何ということか。いくら探してもバスストップの標識らしいものや、時刻表らしき掲示が見当たらない。思い余って駅の職員に英語で聞いたところ、フランス語でしか返事がない。ひょっとしたら今日中に目的地まで行けないかもしれないという不安が脳裏をよこざった頃、偶然にも、近くにいたおばあさんに身振り手振りで教えられ、バスに乗ることができたのはラッキーというべきか。ハプニングには不安を伴うものであるが、決定的な危険以外のものは、全



て後になって楽しい思い出として残る。

この旅の計画の1つはル・コルビュジェの建築を見る旅であった。建築の勉強をはじめた学生の頃、フランスで活躍した現代建築の巨匠、ル・コルビュジェの作品の中で1955年の建築といわれているロンシャン教会（正式には、ル・シャペル・ド・ノートルダム・デュオという）だけは写真では形がよくわからず、常にな気になる建築であった。

自分の職業の勘というものは誰でも持っている如く、私の場合は写真で見た事のある建築を探し出すという特技がある。見学したい建物の写真と、その説明文を読んでおくと、だいたいの情景が頭に描ける。描いたイメージがあてはまる場所を探すと結構見つかるものである。目的の教会もバスが停車場に着く前に、丘の上に見えた。20年来の念願であった建物が目に入った時の感動は計り知れず、興奮で心が震えるのを覚えた。

徒歩で15分位の丘の上にあるこの教会は素晴らしい造型であった。写真ではわからなかったが、基本的に

は四角いプランを基本として、四つの立面のデザインは全て異なるが、造型的にうまく連続していて、どこからながめても不自然はない。彫刻的な造型で、その為に、張りぼてのように無駄な建築という人もいるようだが、その無駄が人々の心に深く感動を与える造型を削っているのなら、そんな分析は無用である。教会建築については素人と同じだが、そこで行なわれることについては知っている。内部を見学しながらその行為



を想像したところ、機能的によく考えられたよい建物であることが解った。外部の造型は全て内部の機能の為に役立っている。光の採り入れ方なども、ひとつの例である。天井直下の壁にあるスリットからの光、礼拝の祭壇にだけふり注ぐ光、大小様々な奥深い窓から見える光。こんなに機能的に無駄のない合理的なものとは、文献から判断できなかった。

良い建築とは何か、というお手本といっても過言ではない。建築では、まずその目的とする機能を満足させる事が基本的理念である。その中であって、どこまでデザインできるかである。良い建築のデザインとは、機能も、空間的表現も、あるいは装飾も、全て人間を高めるためにある。

全て人間の為に行う行為であるとする原点を忘れてはいけない。

写真を撮ったり、スケッチをしたりしてその晩は、その村に泊った。名建築に感動し、去り難くなったのではない。帰りのバスがなかったからである。ペンションのようなホテルでは英語が通じなくて苦勞した。学生の頃、ちょっとかじったフランス語語力？で結構やってゆけた。しっかりとディナーを食べ、朝食のカフェ・オ・レを味わい、1泊2食で3,000円とは、オリエントから来た言葉のわからない中年の男に同情した為だけだったろうか。

(建築学科第14回卒)

CAMPUS

mini MEMO

◇石田事務局長が本部人事部長へ

工学部事務局長の石田昭二氏は、61年4月23日付で日本大学本部の人事部長(兼工学部事務局長)に栄転されました。石田局長は36年5月1日に当時の第二工学部に勤務されて以来25年にわたって事務の中核の任務をつとめられました。その間、体育会会長もされて学生の指導にも盡力されました。なお、兼務の工学部事務局長は6月30日に解かれました。

◇工学部事務局長に佐藤光二氏

61年7月1日付で、工学部事務局長に佐藤光二氏が発令になりました。佐藤事務局長は、経済学部経理長からの転入です。

◇校友の母校での教員

昭和61年4月1日付で昇格されました。

助 教 授：橋本 寛 (建10回卒)

原 忠勝 (土15回卒)

専任講師：小川 敏彦 (化14回卒)

◇日本大学大学院工学研究科だより

60年度、次の3人に工学博士の学位を授与。

白水 暢：天然ゼオライトによる下水処理水中のアンモニア性窒素の除去ならびに回収法の実用化に関する研究 60, 12, 23

横田 理：非破壊試験による欠陥寸法の測定精度に関する研究 60, 12, 23

小林忠司：建築用ポリメタクリル酸メチルコンクリートの性状と調査設計 61, 3, 25

白水、横田君は論文博士の16、17号。小林君は課程博士の4号である。横田君は機械21回卒で工学部専任講師、小林君は建築29回卒で現在は前田製管(株)研修センターに勤務しています。

◇新卒者の教員採用

今春卒業した第34回生の校友名簿によると、教員に採用された者は次のようになります。

建築学科 / 秋田県高校、茨城県中学

機械工学科 / 宮城県中学、山形県工高、香川県工高、静岡県養護学校、新潟県工高

電気工学科 / 北海道高校

工業化学科 / 静岡県中学、高知県中学、福島県中学、山梨県高校、群馬県私立校

本人の努力と、教職課程関係教職員のバックアップがあったものと評価できます。

◇図書館の近況

60年4月から貸出時間が、4月～10月(9時～18時) 11月～3月(9時～17時30分)になりました。ただし、春・夏・冬の長期休暇中は別時間です。

卒業生も借りられますのでご利用下さい。

図書館で現在、所蔵している雑誌は、和雑誌が1,060種類、洋雑誌は1,137種類です。このほか、58年度からオンラインによる情報検索サービスを始めましたので、世界中の最新情報が端末機を通じて数分で網羅することが可能になりました。

◇体育館東側庭園工事が竣工

かねてから計画されていた大講堂(体育館)東側の庭園は、昭和60年11月25日に完成した。

各所に大谷石やケヤキ・ツツジ・サツキ等を配した庭園となっている。



◇「創建」2冊目の合本、出来る

建築学科の教室報として「創建」が創刊されて、もう20年の歳月が流れた。丁度、第二工学部から工学部への学部名が改称された1966年4月から、年3回の割合で刊行を続けている。10年前、通巻30号に達したのを機会に、合本を作成したのに続いて、この度、60号になったのを契機に合本(31-60号)を作成した。

2冊の合本は、そのまま本学部建築学科の歩んできた歴史として、貴重な資料であるといえる。建築学科を卒業された校友の氏名も、必ず卒業研究受理者一覧に掲載されているわけだ。教員が交代で執筆した連載の記事では、教室の講義とは別の一面を識ることができて楽しい。

第一、こうした教室報が、20年も続いているというのは、他大学ではまず皆無であろうと思われる。若干残部があるので、実費でお頒けすることもできる。

(この項「創建」編集室より)

◇課外活動各部の活躍 (61年2月～61年6月)

○ソフトボール同好会

第21回全日本大学ソフトボール選手権東北北海道地区予選会(本学グラウンド)で2位。(〆～〆)

8月8日から岐阜県での全国大会出場。

○軟式庭球部

第37回東北地区大学総合体育大会(〆)優勝。

(この項、学生課調べ)

(た)

昭和62年度入学試験

日本大学工学部

*入学試験

○募集人員

土木工学科、建築学科 } 各学科130名
機械工学科、電気工学科 }
工業化学科----- 80名
計600名

○試験科目

英語：英語Ⅰ、英語Ⅱ
数学：数学Ⅰ、代数・幾何、基礎解析、微分・積分、
確率・統計（ただし統計を除く）
理科：「理科Ⅰ（物理の分野）、物理」、「理科Ⅱ（化学の
分野）、化学」のうちから1科目選択

○受け付け期間 昭和62年1月10日(土)から
昭和62年2月 9日(月)まで

○試験日 昭和62年2月15日(日)

○試験場 (郡山) 日本大学工学部
(東京) 日本大学経済学部、
日本大学法学部

○合格発表 昭和62年2月23日(月)

*推薦入学

指定校制度による推薦入学があります。
募集人員は若干名

問い合わせ先 日本大学工学部入試係
(電話0249-44-1300)



〔事務局便り〕

- 日本大学は昭和64年に創立100周年を迎えます。上掲のマークはその統一シンボルマークです。
- 日本大学工学部は昭和62年に移設40周年を迎えます。いろいろと企画が計画されているようです。
- 日本大学工学部校友会は昭和63年に創立30周年を迎えます。このように節目がめじろおしです。
- 校友会報を今回からカラー印刷にしました。会員各位のご意見をお寄せ下さい。
- 工学部校友会の総合会員名簿は62年夏に改訂発行の予定です。そのための実状調査を62年3月に行なう予定にしていますのでご協力をお願いいたします。
- 第6回「母校を訪ねる会」は10年26日(日)に開きます。第14回生(41年3月卒)を対象としています。該当しない校友の参加も歓迎します。前日にクラス会などの開催等を計画されて、多数出席されるようお願いいたします。

北海道支部

支 部 長 佐々木義則(土10回)江別生コンクリート(株)
事務局長 松久 房夫(土19回)札幌市下水道局

東京支部

支 部 長 古村 和夫(土3回)古村建設株

東海支部

支 部 長 平野 卓(土3回)
東京エンジニアリング(株)名古屋支社
事務局長 河野 叶(土6回)福徳建設株

九州支部

支 部 長 矢保 敏之(建8回)株大林組 福岡支店
事務局長 陶山 順一(建15回)株陶山建設

四国支部

支 部 長 谷久 嘉典(土8回)南谷久工務店
事務局長 北岡 保之(化14回)高松市下水道建設課

校友会報 第48号

発行部数 30,000部

発行所 日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原1
郵便番号 963-11
電話番号 郡山(0249)44-1327
振替口座番号 郡山5-1990

発行日 昭和61年9月1日
発行者代表 会長 武田 仁 幸
編集者代表 事務局長 佐藤 光 正